

被爆体験の語り部 山岡ミチコ

略歴

1930年3月24日 広島市中区竹屋町にて生まれる。

1945年8月6日 進徳女学校3年生（15歳）学徒動員で働いていた電話局に向かう途中、爆心地より800メートルの路上で被爆。瓦礫の下に埋もれているところを、探しにきた母親に助けられる。



1955年 25人の原爆乙女（Hiroshima Girls）の一人として渡米。アメリカ人クエーカーの家庭にホームステイをしながら、ニューヨーク市のマウント・サイナイ病院にて、一年半に渡ってケロイドの治療を受ける。



1958年 広島市内の土井田洋裁専門学校で洋裁を教え始める。その後流川幼稚園の保育母として働く。

1979年 母・アキノさんの死をきっかけに、被爆体験を語り始める。以後、戦争の愚かさ、命の大切さを若い世代に語り継ぐため、国内外で被爆体験の証言活動を行ってきた。ワールド・フレンドシップ・センターへ関わり始める。

1995年4月 被爆50年の春、米国ワシントンDCの私立シドウエル・フレンズ学園に「平和スピーカー」として招かれ、被爆体験を語る。

1996年2月 フランス、パリの原爆展にて被爆体験を語る。

2002年11月 カナダ、オタワの原爆展にて、被爆体験を語る。

2003年7月 幾多の苦難を乗り越えて、自らの体験を語り継ぐ人に贈られる「第一回人類の声賞」をアメリカのニューヨークにて受賞する。

2005年4月 長年に渡る被爆証言活動の功績により広島市市政功労表彰を受賞する。

2006年8月 脳梗塞で倒れ、療養生活に入る。一度は証言活動に復帰したが、また療養生活に専念する。

2013年2月2日 広島市内のホームで、肺炎のため82歳で逝去する。

山岡ミチコさんは、広島での被爆体験の証言活動を続けてきた一人である。当時、山岡さんは15歳で、進徳高等女学校の3年生。動員学徒として電話局に向かう途中、爆心地から800mで被爆。母親に助けられたが、腕や顔に大火傷を負い、頭髪が抜け、血便が出て死を覚悟した。母親の懸命の看護で一命は取り留めたが、15歳の少女の顔は赤黒いケロイドで盛り上がった。戦地から戻った婚約者は驚き、嘆き、そして去った。広島流川教会の谷本清牧師や、米国のジャーナリスト、ノーマン・カズンズ達、日米の市民の支援で実現した渡米治療に参加する。1955年5月から約1年半、ニューヨークのマウント・サイナイ病院で治療を受け、合計27回の手術を受けた。治療に参加した女性は「ヒロシマ・ガールズ」と呼ばれ、全米に被爆の実態を知らしめた。帰国後は洋裁の仕事などをして暮らした。被爆体験を語り始めたのは母親が亡くなった1979年、49歳の時だった。米国やフランス、カナダなど海外にも出向いて、命と平和の尊さを訴えた。生涯独身だったが、子供が大好きだった。証言を聞く子供たちに「自分で考え、行動できる人になりなさい」と語り続けた。2006年8月6日の平和記念式典後、脳梗塞で倒れた。命が危険な状態だったが、リハビリを続け、翌年には病院の食堂で、米国から来た若者に被爆体験を語った。その後介護施設での療養が続いたが、2013年2月2日、肺炎のため天国に召された。